方向

第一六三号　一九九四年四月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

梵天　神車を奉献する

―法華経巡礼　九〇―

1994 03 11　原田憲雄

『妙法蓮華経』を訳したクマーラジーヴァによって同じく訳された『首楞厳三昧経』では、首楞厳三昧を体得した持須弥頂が仏の命によってその妙身を現わすと、この三昧を得ていないものは、帝釈も、梵天も、すべて光を失って墨の塊のようになり、帝釈の宝珠も金剛の明珠も首楞厳三昧の光の前では輝きを失う、と説かれる。前回の、梵天の神車が大通智勝如来の光に圧倒されながら、光を放って輝くのとはおおいに趣を異にする。大乗仏教でも、般若系の経典や『維摩経』などは外教や小乗に対して激しい侮蔑を投げかける。批判として根拠のあるものであろうが、対立するのみではどうにもならない相手の思想や信仰のうちにも、共通の存在理由を見いだし、その光を正しく発揮させようとする釈尊の誓願から生まれたのが『法華経』の神車放光であろうか。

07-18. さて、比丘たちよ、それら五十千万億の世界で、かれら大梵天たちは、みなことごとく連れだって、それぞれの神々しい梵天の神車に乗り、スメールの山のようにうずだかい花うてなをもって、四方を巡歴し、西の方に向かって行進した。そしてそれら五十千万億の世界で、比丘たちよ、あの大梵天たちは西の方で見た、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったかたが、最勝の菩提道場にいたり、菩提樹の下の獅子座につき、諸天、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、

人間と人間ならぬものに取り巻かれ、尊敬されているのを、また息子の十六人の王子が教えの輪を廻されるようお願いしているのを。見たかれらは、その世尊に近づき、世尊の両足を頭に頂いて拝礼し、世尊を幾百千回も右廻りにまわったのち、スメール山のようにうずだかい花うてなを世尊の上に撒き散らし、高さ十ヨージャナのあの菩提樹にも撒き散らした。撒きおわってかれらは梵天の神車をあの世尊に奉献した、「世尊は我々をいつくしんでこの梵天の神車をお受けください、スガタは我々をいつくしんでこの梵天の神車をお使いください」と。

atha khalu bhikṣavas teṣu pañcāśatsu loka-dhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasreṣu ye mahā-brahmāṇas te sarve sahitāḥ samagrās tāni divyāni svāni-svāni brāhmāṇi vimānāny abhhiruhya divyāṃś ca sumeru-mātrān puṣpa-puṭān gṛhītvā catasṛṣu dikṣv anucaṅkramanto 'nuvicarantaḥ paścimaṃ dig-bhāgaṃ prakrāntāḥ / adrākṣuḥ khalu punas teṣu pañcāśtsu loka-dhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasreṣu bhikṣavas te mahā-brhmāṇaḥ paścime dig-bhāge taṃ bhagavantaṃ mahābhijñajñānābhibhuvaṃ tathāgatam arhantaṃ samyak-saṃbuddhaṃ bodhi-maṇḍa-varāgra-gataṃ bodhi-vṛkṣa-mūle saṃh 'āsanopaviṣṭaṃ pari-vṛtaṃ puras-kṛtaṃ deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃnara-mahoraga-mānuṣyāmanuṣyais taiś ca putraiḥ ṣoḍaśabhi rāja-kumārair adhyeṣyamāṇaṃ dharma-cakra-pravartanatāyai/ dṛṣṭvā ca punar yena sa bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya tasya bhagavataḥ pādau śirobhir vanditvā taṃ bhagavantam aneka-śata-sahasra-kṛtvaḥ pradakṣiṇī-kṛtya taiś ca sumeru-mātraiḥ puṣpa-puṭais taṃ

bhagavantam abhyavakiranti smābhiprakiranti sma tam ca bodhi-vṛkṣam daśa-yojana-pramāṇam/ abhyavakīrya tāṇi brāhmāṇi vimānāni tasya bhagavato niryātayāmāsuḥ / parigṛhṇātu bhagavān imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya / paribhuñjatu sugata imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya //

07-19. そうして、比丘たちよ、かれら大梵天たちは、それらおのおのの神車を世尊に奉献し、さてつぎのふさわしい偈によって、その世尊をまのあたりに讃嘆した。

atha khalu bhikṣavas te mahā-brahmāṇas tāni svāni-svāni vimāṇāni tasya bhagavato niryātya tasyām velāyām tam bhagavantam sammukham ābhir gāthābhiḥ sārūpyabhir abhiṣṭuvanti sma //

07-20. めったにお会いできず、無量の幸いと慈しみをお持ちになるジナが世間に出現された。

あなたは、われらの救済者、教授、導師として生まれ、こんにち十方のものが利益をえました。（二一）

五十千万の千倍をこえる世界が、ここにあり、そこからわたしたちは、

ジナを礼拝するために来たのです、最上の神車を捨てて。（二二）

わたしたちのなした過去の行為によって、この神車は飾られています。

お受けください、われらへの恩恵として。お使いください、世間を知る方よ、思いのままに。（二三）

āścarya-bhūto jina aprameyo utpanna lokasmi hitānukampī /
nātho 'si śāstā 'si gurū si jāto anugrahītā daś 'imā diśo 'dya //21//

pañcāśatī koṭi-sahasra-pūrṇā yā⟨W:pī⟩ loka-dhātūna ito bhavanti /
yato vaya⟨W:vayaṃ⟩ vandana āgatā jinaṃ vimāna-śreṣṭān prajahitva sarvaśaḥ //22//
pūrveṇa karmeṇa kṛtena asmin⟨W:asmaiḥ⟩ victra-citrā hi ime vimānāḥ /
pratigṛhya asmākam anugrahārthaṃ paribhuñjatāṃ loka-vidū yatheṣṭam //23//

07-21. さて、比丘たちよ、かれら大梵天たちは、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚った方をふさわしい偈で讃嘆したのち、世尊にこのように言った。「世尊は教えの輪を廻してください。スガタは世間に教えの輪を廻してください。世尊は涅槃をお説きください。世尊は衆生をお救いください。世尊はこの世間に利益を与えてください。法の主なる世尊は、法をお説きください、悪魔や梵天と共なる世間のために、沙門と婆羅門と共なる、また神々や人間やアスラたちと共なる命あるものたちのために。それは多くの人々のために幸福と安楽となり、世間を慈しみ、多くの人々のため、神々や人間たちの幸福と安楽になるでしょう。

atha khalu bhikṣavas te mahā-brahmāṇas taṃ bhagavantaṃ mahābhijñājñānābhibhuvaṃ tathagataṃ arhantaṃ samyak-saṃbuddhaṃ saṃmukham ābhiḥ sārūpyābhir gāthābhir abhiṣṭutya taṃ bhagavantam etad ūcuḥ / pravartayatu bhagavān dharma-cakraṃ pravartayatu sugato dharma-cakraṃ loke deśayatu bhagavān nirvṛtiṃ tārayatu bhagavān sattvān anugṛhṇātu bhagavān imaṃ lokaṃ deśayatu bhagavān dharma-svāmī dharmam asya lokasya samārakasya sabrahmakasya sa-śramaṇa-brāhmaṇikāyāḥ prajāyāḥ

sa-deva-mānuṣāsurāyāḥ / tad bhaviṣyati bahu-jana-sukhāya lokānukampāyai mahato jana-kāyasyārt-
hāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca //

07-22. そのとき、比丘たちよ、かれら五十千万億の梵天たちは、ともに声を揃えて合唱し、あの世尊に、ふさわしい偈で、こう語りかけた。

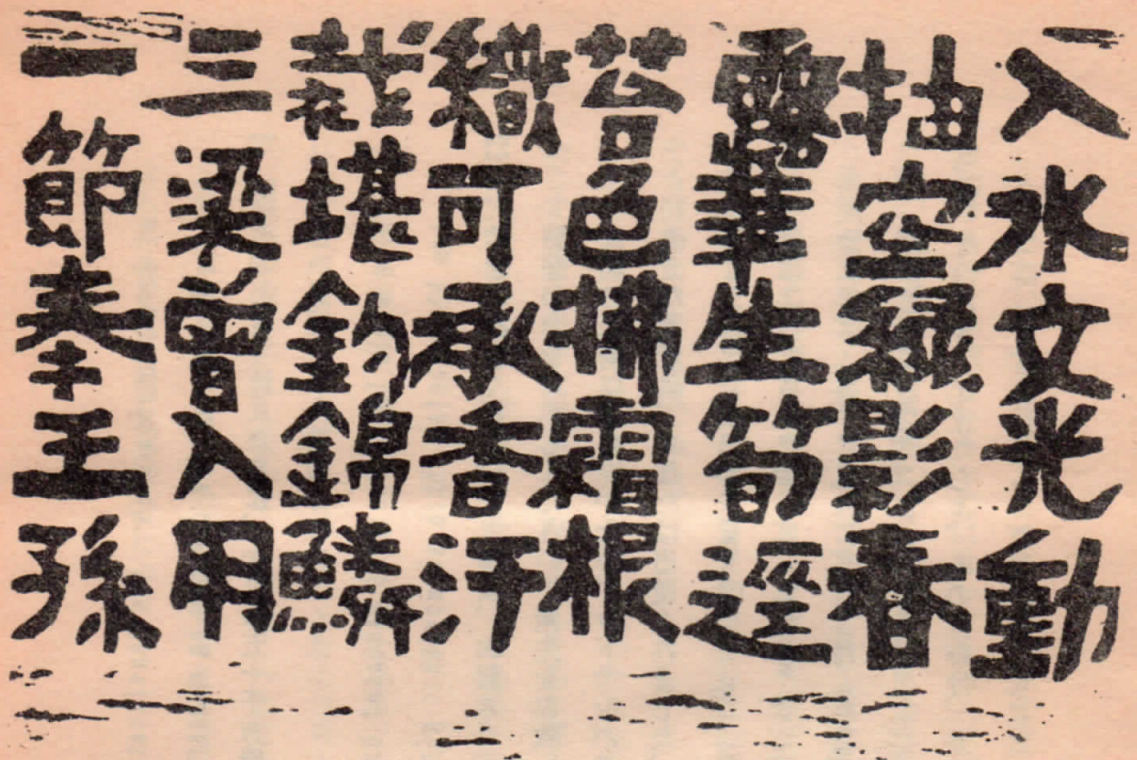
atha khalu bhikṣavas tāni pañcāśad-brahma-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇy eka-svareṇa sama-saṃgītyā
taṃ bhagavantam abhiḥ sārūpyābhir gāthābhir adhyabhāṣanta //

07-23. 法をお説きください、世尊よ、お説きください、両足の者の最高の方よ。
慈悲の力をお示しください、衆生をお救いください、苦悩から。（二四）
世間の光明には会いがたい、ウドゥンバラの花のように。
偉大な勇者よ、あなたは出現されました、あなたにお願いします、如来よ。（二五）

deśehi bhagavan dharmaṃ deśehi dvi-padottama /
maitrī-balaṃ ca deśehi sattvāṃs tāraehi duḥkhitān //24//
durlabho loka-pradyotaḥ puṣpam audumbaraṃ yathā /
utpanno 'si mahā-vīra adhyeṣāmas tathāgatam //25//

07-24. そのとき、比丘たちよ、その世尊は、かれら大梵天たちの願いを、沈黙によってお受けになった。

atha khalu punar bhikṣavaḥ sa bhagavāṃs teṣāṃ mahā-brahmaṇāṃ tūṣṇī-bhāvenādhivāsayati sma //



山本のぶを刻（一九八一　一）

李賀　竹

水に垂れる　波紋がゆらぐ
空に抽きんでる　緑の影は春
キラキラと露の花さくたけのこの径
霜ふいた根っこを払う苔のいろ
むしろに織れば香しく汗ばむ肌ささえ
切り取れば錦鯉だって釣れるだろう
太子用の三段の冠の骨にもなった
ひと節あなたにあげましょうか

三梁とは、太子や諸王がかぶる冠の三段のことで、梁はその段を支える竹の横骨。王孫は、若殿というほどの意。末句はあなたも太子にでもなられるように、一節あげましょうか、というのだ。かるい戯れである。（1994 03 27　原田憲雄）

春に聞く

1994 03　原田慶

卒業式

1994 03 23

三月十八日、娘の卒業式に出席した。来なくてよいと娘は言ったが、私が学校と呼ぶ場へ行くのは最後の機会かも知れないと思ったのと、学長の寺川俊昭先生のお話が聞きたかったからである。学園祭の時には《死は救いでありうるか》というお話を聞かせていただいた。

式が始まって、お仏壇に礼拝があり、卒業証書が授与された後、学長先生の告示が始まった。

「私が自分の人生を振り返ってみて、幸いだったと思うのは、何人かのよき友を得ることができたということであります」

このように話し出された。娘が四年間講義を聴いた大河内了義先生という方がおられ、そのお父さんの大河内了悟師もいっとき大谷大学の先生だったが、地方の寺の住職として一生を過ごされたそうである。その了悟師の〝友なり、師なり、仏なり〟という言葉を引いて、話が続いた。そのお話は、娘が学校で頂いた印刷物によると、次のようなことである。

人生において友を得ることほど大きな喜びはない。友はかけがえのない宝である。ここで友というのは、単なる知り合いや仲間をいうのではない。その人の存在すること自体が私にとって大きな意味を持つような人。困った時、問題が起こった時に、その人と話し合うだけで、または会うだけで、その問題を荷ない、それに立ち向かう勇気が湧いてくるような人である。そのような人は、いつもあたたかく、しかも厳しく私を見つめていてくれるように感じる。だからその友には教えられているという思いが湧いてきて、友の生き方に学ぶと言う姿勢が私に生まれてくる。これは全く甘えの許されない厳しいもので、友のうちに「師」を見出すことであり、これはいっそう深められた友情である。

このような友情は、友となり師となった人を生かしめている原理、その根拠は何なのかという深い問いを呼びおこす。その時、友であり、師であるその人間を通して、人間的次元を越える世界にふれる。ここではじめて私は「人間の根拠は人間を越えたところにある」ことに深くうなづかされる。

これが〃友なり、師なり、仏なり〃ということだそうである。人間を越えるということは、自分の存在を仏様にあずけて自分は無になるということなのだろうか。わたし達はお経の最後のほうでいつも、

悩みや煩いが数え切れないほど起こって来ようとも、どうぞ、断ち切ることができますように。

と祈る。断ち切るというのは断念することではない。乗り越えるということだと思う。

さらに先生はお話を進められて、

初代学長の清沢先生は、友を選ぶことは要らぬ。先ず自分に真の朋友たりうべき資格を求めねばならぬ。人生のあらゆる場面で、もつべきは友である。と言われました。親鸞聖人は、弟子は一人も持たず候、とおっしゃって、みんなともに歩む人、同朋、同行と呼ばれました。真の朋友とはこの同朋に呼応する言葉であります。この「真の朋友」という一言を、いま学窓を巣立つ諸君に贈ります。在学中に得た友、これから出会う友もありましょう。友に恵まれるにつけ、この言葉を忘れないでいただきたいと思います。どうか幸せなよい人生を歩まれますよう念じます。

というお話で終わった。

寺川先生は学長の任期を終え、定年を迎えますとおっしゃったが、別れと言うのは何とも悲しいものである。会ったものはかならず別れなければならない。

先生は広島県の方で、原爆が投下された時に学徒動員で市内の学校におられなかったため助かったそうである。原爆で焼け爛れた中を、学校の友達を探して歩きまわり、そのむごたらしさを目にして、医学の勉強を変更して仏教を研究されたということを、入学式のときに話された。そのとき一緒に歩いた友は、同じ所を歩きながら、どうしてかその人だけが白血病になって亡くなり、自分は助かった。不思議だが、何かのおぼしめしで生かされているとしか考えようがない。と、学園祭のシンポジウムの時にはおっしゃった。そして、〃死は救いであり得るか〃については、死んだ後どうなるとか、死後の世界のことなど思い煩うことはいらない、一所懸命に努力し

て生き切るのだ、結果として死がある、心配することなど何もない。とされ、自分のお母さんが亡くなったときは、もちろん悲しかったが、よく死んでくれたというほっとする思いもあった、とおっしゃった。誰でも必ず死ねるとはいうが、安心してきちんと死ぬというのはやはりむつかしいものだろうと思った。

いつまた寺川先生のお話を聞く機会に恵まれるだろうか。いろいろな思いを残して校門を辞した。街に出ると、この家々に娘が四年間、馴れ親しんで通学したことを思い、一軒々々有難うと言って歩きたいようなつかしさと、別れの寂しさを感じながら帰ってきた。よい卒業式をしていただいてほんとうに幸せだったと思っている。

わたしには、今年定年を迎える小学校長の友がある。この人は三十八年間、淡々として苦労を楽しみに変え、じっくりと腕組みをするように問題を見据えて乗り越えてきた。このような態度には教えられることばかり多く、また喜びも分けてもらった。その人がどんな卒業式をするのだろうか。三月二十三日、わたしはその人のために卒業式に出席した。わたしが居ることをその人は知らなかった。

卒業生は五十九人。市内の小学校はどこも子どもが少なくなって併合が進んでいる。一人ずつ氏名が呼ばれて、大きな声で返事をすると、子どもは壇上で卒業証書を受け取る。それぞれに言葉をかけながら、顔を見て渡している校長先生の態度には自然なものがあって、この人の日常が感じられた。

学校長式辞。どんな話をするのだろうと思っていると、少し緊張したその人の声が聞こえた。

卒業生の皆さんご卒業おめでとうございます。多くの人々に支えられてここまで来た感謝の気持ちと、義務

教育の六年間を成し遂げた喜びを、じっとかみしめてください。今年は建都千二百年にあたり、新しい時代の荷ない手として皆さんへの期待はほんとうに大きなものがあります。

と話し出した。ふだんからきびきびした話し方をする人だが、常よりいっそうはっきりと明瞭な話し方をしている。そして、卒業生に贈る言葉は〃自分のよさを生かそう〃ということだった。長所を伸ばし、役立つ人になろう。誰にもよいところはあるから、互いによさを認めあい、よい友達をつくろう、ということだった。

常には華やかな服装をしている人が、この日は黒のスーツで、目立つような飾りもなく、簡素だったので、かえって若々しく、この人の新任当時を想像させて大変好もしかった。子ども達は大学の卒業式と違って、まだ学業は始まったばかりだから、じきに中学校に入学する。気分は寂しさより明るさと希望のほうが大きい。校長最後の卒業式とはいっても、まだ仕事は残っている。ひとつずつやり終えてゆく責任感のほうが強いだろう。この人の壇上に立つ姿を見ていると、反対に自分が写し出されるような気がする。わたしに何か成し終えたことがあるだろうか。生き切らなければ、結果として安心して死を迎えることはできない。自分にできることに努力する、それがよさを伸ばすということになるのだろう。

わたしは卒業生の退場と一緒に外へ出た。図工の研究大会などでこの学校を訪ねたこともあったけれど、この校長先生、森山恒子さんがいなくなったら、この学校に足を踏み入れることもないだろう。校門から校庭を振り返って眺めてから、誰にも何も告げないまま、わたしはバスに乗った。

日頃、何の才覚もできないわたしが、どのようにして式場に入ったのかと、森山さんは不思議だろうが、子ど

もの親戚だと言って入れてもらった。こんなことがよくできたものだと自分でもびっくりしている。

彼　岸　会

1994 03 21

今年は春が遅くて、例年なら満開になっている白もくれんが、二十日の法要にはとうとう花を開かなかった。

こんどの法要から、お供養のお弁当作りを檀家の奥さん方に手伝ってもらうことにしたので、目のまわるような思いはしなくてすむことになった。以前は住職の弟の奥さんの奈緒美さんや、檀家の井元幸子さんに手伝ってもらっていたが、その人達が忙しくなって、時には、わたしが一人だけになったり、娘と二人だったりで、六十個のお弁当を作って後始末をするのは、かなり忙しかった。

初めて手伝ってもらう人達のために、少し気をつかって、台所を磨いたり、天井のほこりを払ったり、細々とした道具なども揃えて準備をした。

朝八時すぎに大阪や宇治から来てくださったが、そのためにずいぶん早く家を出られたことと、ありがたかった。仕事は娘が、子供のころから手伝っていて馴れているので、奥さん達と一緒にお弁当を詰めて、十時の法要にはじゅうぶんに間にあった。

寒かったがお参りは多くて本堂いっぱいになった。いつものように、『妙法華経新訳要品』と名づけた住職の

訳した日本語の法華経をみんなで唱えるのである。それは例えば日蓮宗の法要式で「奉請（ぶしょう）」といっている「唯願法界海　諸仏諸賢聖　哀愍垂降臨　荘厳此道場」を、「お迎え」と名づけ、

どうぞ真実の世界にまします　あまたの仏たち聖たち　わたくしたちを慈しみ　ここにおいでになって　この道場をお飾りくださいますように

というように、わたし達のわかる言葉で唱えるのである。全体は、

お迎え

礼拝

み教えをいただくときに

妙法蓮華経方便品第二

〃　　譬喩品第三

〃　　見宝塔品第十一

〃　　寿量品第十六

〃　　如来神力品第二十一

諸法実相鈔（日蓮上人のお言葉）

お題目

激励の歌

回向
み仏の誡め
四つの誓い

の順になっている。これは一九六六年に訳したものだから、二十八年間、みなで一緒に唱えてきたことになる。その間にはいく人もの方が亡くなり、新しく生まれた人も加わって唱えてきた。短いようで長い道のりである。その間に長男と長女が寺を出て行き、二女も学校を卒業してそろそろ旅立とうとしている。自分に厳しい人は自分の肉親にも厳しかったのだろう。それを知っていた子ども達は賢こかった。知らずにぶすぶす怒りながら今日まできたわたしだけが、わけのわからない人だった。

昨年から、住職の弟の禹雄さんが京都に帰ったので寺の法要に来てくださり、わたしはずいぶん心丈夫になった。この人はらい療養所の医師として働いていたが、もとから僧侶である。このお彼岸には禹雄上人の御法話を聞くことができた。それは《痛み》についてである。その内容をわたしの聞いたなりに書いてみる。

ハンセン氏病、つまりらい病は、らい菌によっておこる伝染病である。昔は治す方法がみつからず、離島などの療養所に隔離していたが、現在では薬で治すことができるようになった。らいは皮膚と末梢神経の病気と言われるが、人の身体に入ったらい菌は、末梢神経の端からだんだん上って行き、中枢神経が指令を送らなくなるので、皮膚などが痛みを感じなくなる。特に結核に似た型のものにそれがはっきりしている。

痛みを感じないと、切り傷をしても、そげが刺さっても、虫に刺されても、かゆみも痛みも感じない。痛くも

かゆくもないというのはよいことのように聞こえるが、実は大変なことで、傷がわからないから手当をせずにその手や足を使い、そこからばい菌が入って化膿する。手足だけではない、目、耳、鼻、口、身体じゅうどこでも虫に刺されたり、かぶれたり、物にぶつかったり、さまざまに障害が起こる。火に触って火傷もする。だから療養所では患者に台所仕事などもさせずに給食しているのだが、このように痛みを感じないために、どこにどんな傷をしているのか自身では分からないので、医師や看護婦達はまず、毎日これを丁寧に診ることから始めなければならない。

もしわたし達が痛みをこのように全く感じなかったらどうだろう。人間が生まれて大人になるまで、無事に育つことはないだろう。もし痛くなかったら子どもは、面白がって自分の指を切り落としてしまうかも知れない。耳なども取ってしまうかもしれない。痛いということは、それをしてはいけないという信号なのである。歯が痛ければ、それで噛んでくれるなということを知らせているのである。痛くなかったら治療もせず、すべてが駄目になってしまうだろう。痛みを感じることこそ、わたし達を生かすために大切なことなのである。

そして、みずからには痛みなどなかったはずなのに、世界の痛みを感じてしまった人、それがお釈迦様である。優れた力と身体を持ち、王家に王子として生まれ、大切に育てられて、美しい妻と男の子に恵まれ、何の不自由もなかった人が、あるとき、外に出て老人を見た。そして、人間はどうして老いるのだろうかと考えた。また出て葬式を見た。人間はどうして死ぬのだろうかと考えた。そのようにすべての人間の痛みを自分の痛みとして感じてしまった人がお釈迦様なのである。城を出てすべてを捨て、修行して人間の痛みについて一所懸命に考えた。

それが仏の教えである。

「それでは痛みを感じないように生きるにはどうしたらいいのでしょう。それについては、またいつか機会があったらお話しましょう」

ということで御法話は終わった。わたし達は毎日痛みを感じないではいられない。身体的な痛みは治療してもらうことができても、心の痛みを癒すことはむつかしい。あまりの憎しみのために人を殺してしまう人さえ後を絶たない。人の心は病みやすいものである。それをのり越えて痛みを感じないで生きること、それこそ大谷大学の学長寺川俊昭先生が卒業式にされたお話のなかにあった「人間的次元を越える世界」ではないだろうか。

この日の禹雄上人の御法話を聞いた人々で、よいお話を聞かせていただきましたと、住職にお礼を言われた方がなんにんもおられた。わたしも禹雄さんに自然にお礼の言葉が出た。人を素直な気持ちにさせることこそ素晴らしい。

六十個作ってもらったお弁当はすっかりなくなって、別に入れてもらった赤飯だけの紙の弁当箱もみななくなった。この日のお参りの多かったことも、後まですっかり手伝って片づけてもらったことも、すべて有難いお彼岸となった。

千本釈迦念仏　　1994 03 24

三月二十二日、上京区上立売千本を北野へむけて西に入った大報恩寺（千本釈迦堂）の、お釈迦様の遺言を大原声明（しょうみょう）千本式の音律で訓読するという「釈迦念仏遺教経（ゆいきょうぎょう）法要」に参った。

七五〇年前から行なわれている伝統行事であると言われているが、『徒然草』の第二百二十八段には、

千本の釈迦念仏は、文永のころ、如輪上人これをはじめられけり。

と書かれている。文永は一二六四－一二七五年であり、如輪上人は大報恩寺の僧、澄空という人である。同じく二百三十八段には、兼好が千本釈迦堂の念仏に参ったときの出来事が書かれているが、これはまだ出家する以前のことだろうとされている。

昔は釈迦堂では、涅槃会（ねはんえ）の大念仏法要を、毎年二月の九日から二十五日まで催したのだそうである。今年は三月二十二日の午後二時から二時間くらいの法要であった。

大報恩寺の釈迦如来像はそれほど大きなものではないが、お廚子に入っておられて、とてもすっきりと美しい座像である。

お参りのひとは六十人あまり、このお寺には納骨堂があるのでその供養だろうか、二十本ほどの大塔婆と多くの水塔婆があがっていた。

仏前の中央に導師が座られ、両脇に二人ずつ、その両方の控えにそれぞれ十二人ほどの若い僧が並ばれて声明が始まった。

若い人々の張りのある声で唱えられる声明は、驚くばかり清々しく美しいものである。その経の声につつまれて目を閉じていると、わたしは宮沢賢治の「ひかりの素足」を思い出した。

吹雪の中で倒れた一郎と弟の楢夫は抱きあったまま気を失ってしまうが、その時二人は暗く恐ろしい棘の道を、多くの子ども達と一緒に足を傷だらけにしながら、鬼に追われて果てもなく歩き続ける。そしてついにひかりの素足を持った仏によって救われる。闇の道や、剣の髪を持って少しでも動けば身体中に傷を受ける人々を見るところは恐ろしい。それに比べて、仏の国の安らかさ、美しさを、賢治はみごとに描いてみせてくれる。この安らかな国にたどり着いた兄弟は、弟だけがこの国に残り、兄は一人もとの国、わたし達の今いるこの世へ帰ってくる。弟は兄の腕に抱かれて、笑うように安らかに亡くなったのであった。ひかる素足の人は一郎に言う。

「お前はも一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほないい子供だ。よくあの棘の野原で弟を捨てなかった。あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林をゆくことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国にはここからたくさんの人が行ってゐる。よく探してほんたうの道を習へ」

このような言葉を聞く時、心のふるえるような気がする。本当の道というものは、言葉で教えられるだけでわかるものではない。わたしなどはいくら教えられてもいつも闇の世界を歩いている。

目を開けば、まだ学生だろうかと思うほどの若い墨染めの衣姿の人達が熱心にお経を唱えている。その声明は部分的には音符にも移せるようなところがあるが、全体は、そのようになめらかなものではない。

頂いた印刷物を広げてみると、

『仏垂般涅槃略説教誡経（ぶっすい　はつねはん　りゃくせつ　きょうかい　ぎょう）〔抄〕』

と書いてある。唱えられているところをよく聞いてみると、

――睡眠の因縁をもって一生むなしく過ぎて得る所なからしむる事なかれ――

――煩悩の毒蛇睡って汝が心にあり　譬えば　黒蛇の汝が室に在って睡らんが如し　まさに自戒の鉤をもって早くこれを除くべし　睡蛇すでに出でてすなわち安く睡るべし　出でざるにしかも睡るはこれ無慚の人なり――

ああわたしはほとんど六十年間、黒蛇を抱いて睡ってきたのだろうかと思う。今になってみれば眠ろうとしても年をとって、夜も眠れなくて困っている。もう一度やりなおせるものならと思ってみるが、生まれかわったとしても、汚いことはいや、きついことはいや、危険なことはいや、三Kを嫌う人の代表になるだけなのは目に見えている。どうにもならないから貝になりたいような気がする。しかしそれでは六十年間の毒蛇の睡りをそのまま抱き続けることになる。

――多欲の人は多く利を求むるがゆえに苦悩また多し　少欲の人は求め無く欲無ければ則ち患い無し――

――もし諸々の苦悩を脱れんとおもわばまさに知足を観ずべし　知足の法は即ち富楽安穏の処なり　知足の人は地の上に臥すといえどもなお安楽とす　不知足の者は天堂に処すといえどもまた意にかなわず――

これが痛みを感じないで生きることなのだろうと思う。「少欲の人は則ち諂曲（てんごく）して人の意を求むること無し」ともある。諂曲とは、自分の意志をまげてへつらうこと。これが無ければ人を憎むこともないわけ

である。とにかく無欲で足ることを知っていれば悩みも少ないということであるが、これはたいていの人が言葉としては知っている。本当にそうなるためには、決意して実行するほかに方法などというものは無いのである。

——我は良医の如し　病を知って薬を説く　服すると服せざるとは医の咎にあらず——

善い道を示しても、その道を行かないものについては、道を教えた人の過ちではない。一心に善い道を求め勤めなさいと教えて、お釈迦様は涅槃に入られたのである。「南無釈迦牟尼仏」が繰り返された。高い声、低い声、さまざまに唱えてお釈迦様を慕い称えて声明は終わった。

法要がすんで、さてわたしはこれからどのように勤めたものかと思い、まだ耳に残る声明を聞きながらとぼとぼと帰ってきたが、ますます夜も眠れそうにない。睡蛇すでに出でてすなわち安く睡れる日はいつのことだろうか。

法要の時、わたしの隣に座っていたひとは、東京の家を売って、いま、河原町あたりの、友達の家を借りてひとり暮らしているのだと言った。六十歳代半ばのひとで、足が不自由らしい歩き方をしていたが、あちこちの寺へ参ったり、友達を訪ねたり、自由な生き方にたどり着いたひとらしかった。家を売ったお金は、ほとんど株で失ったと言ったが、それほど残念そうにもなく、家など持っていると修理もしなければならないし大変だが、お金も失ってみると、家があったほうがまだましだったかなあと思っていると言って淡々としていた。それでもなんとか自分の生活は保っているわけだし、家を貸してくれるような友達や、訪ねて語り合ったりする友があるというのだから、その人柄もわかる。現代人の到り着くほんとうの自由な世界に住んでいるひとなのかもしれない。

劉　孝　綽

（中国の詩人と仏教　三五）　1994 03 16　原田憲雄

仏教王朝とも言いうる梁の、六世紀前半の五五年間に、男女七〇人にあまる文学者を出した有名な一族があります。彭城（江蘇）の劉氏です。なかでも知られたのが昭明太子の文集の序文を書いた劉冉、字は孝綽（四八一―五三九）ですが、その弟たちも「孝」を共有する字で通り、のちに取り上げる七番目の弟の孝先などは、名が分かりません。

主だった家族について、ざっと説明しておきましょう。

孝綽の祖父の劉勔（四一七―四七三）は、宋の元勲で、司空に上った人。父の劉繪（四五八―五〇二）は斉の大司馬従事中郎で、武事にも優れながら詩文に長じ、永明文学の理論的代表の一人であり、詩人の代表ともいうべき謝朓と親交があり、ともに聯句を作ったりしています。詩に「有所思」（思うひと）があります。

別離安可重　　別れの嘆きをなぜ重ねよう
而我更重之　　だのにわたしはまた重ねた
佳人不相見　　あのひとに逢えもせぬのに
明月空在帷　　月影だけがカーテン照らす
共御満堂酌　　満堂の客と杯を酌みながら

独斂向隅眉　　片隅で眉顰め独りぼっちだ
中心乱如雪　　人たちの心はみだれふる雪
寧知有所思　　なぜ知ろうわたしのおもい

現存の作品には仏教との関わりを思わせるものはありませんが、斉から梁にかけての高僧法雲と「莫逆の交り」があった、ということが『続高僧伝』に見えますから、四九七年に法師が妙音寺で行なった『法華』『浄名』二経の講義は聞いていたにちがいありません。

孝綽は、七歳ですでに文章に巧みでした。父の繪は、斉朝の詔勅を起草する職務でしたが、まだ十五にもならないこの息子にしょっちゅう代作させていたそうです。さきに「竟陵王」の章で紹介した王融は、孝綽の母の兄弟ですが、この甥を自分の車にのせて親友の家々をつれ歩き「神童だ」とふれまわったものですから、たちまち評判になり、沈約や任昉、范雲といった文豪たちが、進んで面会に来るという騒ぎです。梁朝に入ってすぐ著作佐郎に任ぜられ、秘書丞に転じ、武帝や昭明太子蕭統（五〇一―五三一）に愛重され、その断簡零墨まで人々に書き写され、宝貴されました。今日のこっているのは文一六篇、詩六七首にすぎませんが、そのなかに「雲法師に答うる書」や「栖隠寺の碑」があり、詩に「百論罪福を捨すを賦詠す」や「昭明太子の鍾山解講に奉和す」があります。「雲法師」は父の繪と親しかった法雲でしょう。鍾山は、金陵山とも紫金山ともいい、梁の都の建康（今の南京）の東の山で、五二〇年、武帝が父親の菩提のためにその北の谷をひらいて大愛敬寺を建てました。ここで太子が仏教学の講義を主催し、その記念に「鍾山解講」と題する詩を詠じたのでしょう。太子の周辺の貴

族たちが唱和したうち、陸倕、蕭子顕、そうして劉孝綽とその三弟の孝儀の作品が今に伝えられるのです。太子も父武帝の薫陶を受け、儒・仏・道の三教に詳しく、それぞれについての著書もあり、仏教については「二諦」「法身」など重要な議題についての論文を書き、光宅寺の法雲が講義を依頼しているくらいです。太子の死は五三一年ですから、鍾山解講はその前の数年間のことでしょう。孝綽の奉和作。

御鶴翔伊水　鶴に乗って伊水を飛び
策馬出王田　馬に鞭うって王の苑田を出
我后遊祇鷲　わが君は法の御山に遊ばれる
比事実光前　じつに前代を照らす比類ない事
翠蓋承朝景　翠の車蓋は朝の光をうけ
朱旗曳暁煙　朱の旗は暁の霧をひき
楼帳縈巖谷　たかいとばりが巖谷をめぐり
緹組曜林阡　赤い紐が林道にきらめく
況在登臨地　まして登臨にふさわしい地
復及秋風年　秋風さわやかな節季にであい
喬柯変夏葉　たかい木々は夏の葉を変じ
幽澗潔涼泉　ふかい谷間に泉がきよらに湧く

停鑾対宝座　輿をとどめて宝前に対座し
弁論悦人天　その弁論は人と神とをともに喜ばせ
淹塵資海滴　欲塵を潤す恵みの海滴の資とし
昭暗仰燈燃　闇路を照らす仏灯を仰がせたのだから
法朋一已散　法会の聴衆はいったんすでに解散し
茄剣儼将旋　吹奏剣戟隊もきらびやかに帰還しはじめる
邂逅逢優渥　たまたまありがたいお招きにあずかり
託乗侶才賢　すぐれた方々の大車に同乗し
擒辞雖並命　詩を作るべく共に命ぜられたが
遺恨独終篇　残念ながらわたしが最後の唱歌者だった

できあがるのが最後でも、太子の法義と詩とを讃嘆する結びにふさわしい作として、賞誉を博することに自信があったのでしょう。『無量義経』や『法華経』のことばをちりばめて、いかにも巧みにできてはいるが、しょせんは儀礼の詩で、いまのわたしたちの心にしみ入るようなものではありません。弟の孝儀の作も、他の二人のも同じことです。もっとも、それは儀礼の詩であるということだけではなく、かれらの文学理論にも関わりがあるのでしょう。というのは、かれらは形式的な美の追求が文学の目的だとする新しい考え方を推進し、そのことによって中国の文学をほとんどまったく転換したのです。